

「再埋め込み」の時代

—— 生活満足度の高さが意味するもの ——

土 井 隆 義

1. はじめに一劣悪化する生活環境—

欧米では、若者の失業率の上昇が彼らの暴力行為を誘発している。2011年夏にイギリスのロンドンで発生した暴動では、逮捕者の51%が20歳以下の若者だった。カナダのバンクーバーで起きた騒乱でも、中心にいたのはやはり若者だった。彼らの多くは失業しており、自らの未来に夢を抱けない状況に置かれている。

日本でも、現在、史上最悪の失業率が続いており、とくに若年層の厳しさは著しい。かつての一億総中流神話が崩れ、格差化も進んでいる。学齢期の子ども の状況も同じで、同居する大人の所得で計算する17歳以下の子どもの貧困率は、1985年には10.9%だったが、2011年には15.7%へと4.8ポイントも増加している。

このように劣悪な環境に置かれているにもかかわらず、日本の若者たちはいたって平穏な様相である。暴動騒ぎどころか、小さな暴力事件ですら減っている。近年、少年犯罪は減少の一途を辿っているし、その他の逸脱行動も減っている。近年は自殺者数が毎年3万人を超え、大きな社会問題となっているが、その多くは高年齢層である。若者の自殺者数が近年とくに激増しているわけではない。むしろ若者の生活満足度は上昇しており、次節以降で詳しく検討するように、その傾向はとくに10歳代で著しい。

現在、日本の若者たちは、非常に厳しい状況に置かれているはずなのに、みんな幸せそうに暮らしているのはなぜだろうか。若年層の間では、どのような事態が進行しつつあるのだろうか。満ち足りた生活を送っている人間は、問題行動に出ることも少ないだろう。したがって、若者たちの幸福感の強さの背景を探ることは、彼らの問題行動の少なさの背景を探ることでもある。

一方では格差社会化が進行し、若者の貧困率も高まりつつあるというのに、他方では彼らの問題行動が増えていないのは、いったいなぜだろうか。劣悪化する環境に対して、当の若者たちはどのような意識を抱いているのだろうか。拙論の目的は、その社会背景を探ることにある。

2. 制度的枠組の揺らぎと人間関係

●現状に対する高い満足度

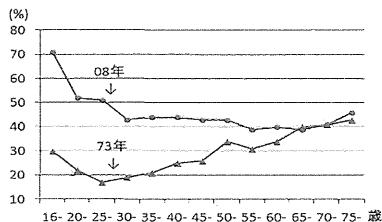
NHK放送文化研究所（2010）は、1970年代から今日に至るまで、日本人の意識調査を継続的に実施し、その比較検討を行なっている。その結果を経年比較すると、日本人の生活全般に対する満足感は、1970年代以降、若い世代ほど高まる傾向にある。とくに2008年の調査では、【図1】が示すように、10歳代の約7割が満足感を表明している。

日本の若年層の生活満足度が上昇している背景として、しばしば指摘されるのは、我が国が高度成長を終えて成熟社会に入っているという事実である。たしかに相対的貧困率は上昇しているものの、私たち日本人の多くは、少なくとも生活に困るような絶対的貧困に置かれているわけではない。現在の若者の多くも、それなりに豊かな社会を生きている。だから、まだ貧しかった時代とは違って、彼らの生活満足度は上がっているというのである。

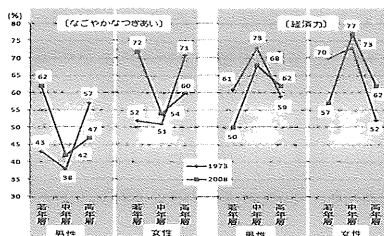
しかし、その豊かさを享受しているのは何も若者だけではない。若年層と比較して、高年齢層は相対的に良好な生活環境にいるのだから、豊かさの実現によって生活満足度が上昇しているのなら、その傾向はむしろ高年齢層に強く出ていなければならない。あるいは、少なくとも各年齢層がほぼ等しく上昇していなければならない。しかし、現実にはそうなおらず、高年齢層の満足度は上昇していないのに、若年層だけで上昇している。これはなぜだろうか。

NHK放送文化研究所による調査は、「充実した生活を送るために大切なもの」も問うているが、【図2】が示すように、1970年代の若年層では、「なごやかな付きあい」が大切と考える人びとより、「経済力」が大切と考える人びとのほうが多く、それが全体の6割から7割を占めていた。しかし、2000年代の若年層では、両者の順位が逆転し、「なごやかな付きあい」が大切と考える人びとのほうが、全体の6割から7割を占めるようになっていた。ここから推測されるのは、劣悪な生活環境への不満が、豊かな人間関係への満足によって埋め合わされているという事実ではないだろうか。

内閣府が継続的に行なっている世界青年意識調査によれば、家族といるときに充実感を覚える日本の若者の割合は、【図



【図1】生活に対する満足度の比較



【図2】充実した生活を送るために大切なもの

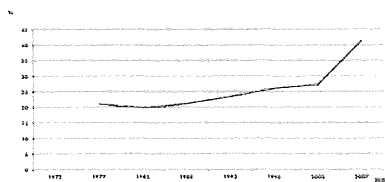
3】が示すように、1980年代から上昇しつつつけている。また、地域社会に愛着を抱く若者の割合も、【図4】が示すように、同様に上昇している。血縁や地縁といった共同体の抑圧力の強さに不満や反発を覚える若者たちは、現在ではどんどん減少している。その社会背景としてまず考えられるのは、社会の成熟化にともなう世代間ギャップの縮小だろう。

では、現在に近づくほど世代間の意識のギャップが縮小してきた理由は何だろうか。ここで、我が国の経済成長率の推移を考えてみたい。大戦後の我が国は、高度成長の時代から安定成長の時代へと、そして低成長の時代へと、その歩む速度を徐々に落としてきた。このような社会成長の変化を模式的に描くと【図5】のようなイメージになる。この図では、それぞれⅠが高度成長の時代、Ⅱが安定成長の時代、Ⅲが低成長の時代に当たっている。

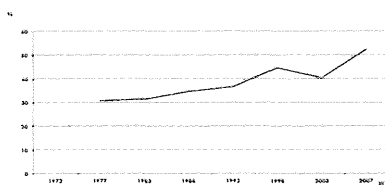
ここでⅠとⅢの時代を比較してみよう。Ⅰの時代の旧世代の位置イと新世代の位置ロとの時間的な距離を示すaは、Ⅲの時代の旧世代の位置ハと新世代の位置ニとの時間的な距離を示すbと、互いに等しくなるように設定してある。ところが、それぞれの時代で旧世代と新世代の人びとが生きる社会段階の落差を示すcとdは大きく異なっている。イとロには大きなギャップがあるのに対し、ハとニにはほとんどギャップがない。変化の激しい社会では世代間のギャップも大きくなり、変化の小さな社会では世代間のギャップも小さくなる。社会の成熟化は世代間の意識ギャップを縮小させ、激しい世代間対立を終結させるのである。

●人間関係の基盤の脆弱化

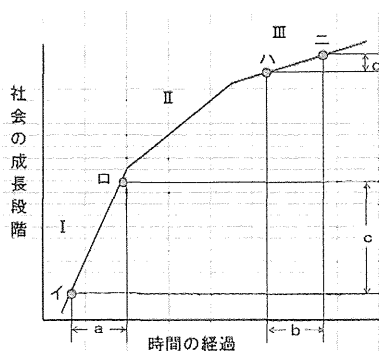
しかし、今日の若者たちの間で、人間関係に対する満足度が上昇している理由は、世代間ギャップの縮小だけではない。なぜなら、【図6】が示すように、友人や仲間といるときに充実感を覚える若者も、また同様に増えているからである。



【図3】 家族といるときに充実感



【図4】 地域社会に愛着を抱いている



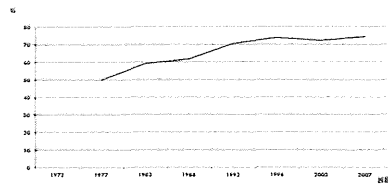
【図5】 社会成長のイメージ図

その事情は、【図7】が示すように、学校生活に対する満足度が、1970年代からほぼ一貫して増加の傾向にあることから推測される。

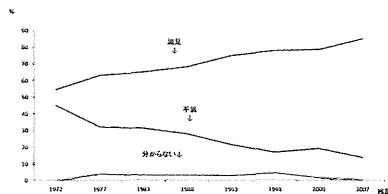
学校とは、社会的に称揚される文化目標を内面化し、その達成手段を獲得する場であると同時に、同じ世代の人間と関係を育んでいく場でもある。したがって、学校生活への満足度が高まっているということは、教師と生徒の間の世代間ギャップが減少したという事実だけではなく、これらの諸側面で良好な環境にあると感じられているという事実を示唆している。

じっさい、学校生活への満足度が一般的に高まるなかで、不登校になるような若者も一部には存在しているが、彼らが不登校になるきっかけは、文部科学省の調査によると、「学業不振」と「友人関係」が圧倒的に多い。2009年度に不登校になった理由を示した【図8】が示すように、とりわけ後者の比重が高いのが今日の特徴である。ベネッセコーポレーションが2006年に行なった調査でも、「いい友だちがいて幸せになれる」と回答した高校生は、全体の約96%に上っている。逆に、友だちと対人関係を器用に築けない人間は、周囲からの評価がきわめて低くなってしまう。

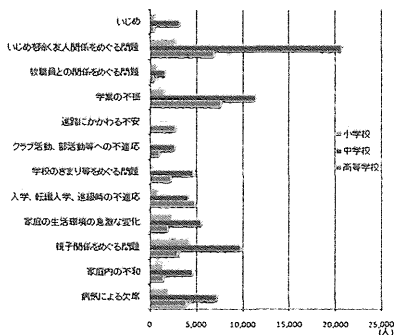
ちなみに、大学生の場合も事情はほぼ同様で、NPO法人の NEWVERY が2009年に行なった調査によれば、【図9】が示すように、大学生の中退理由でもっとも多いのは学業不振であり、その次が人間関係である。しかも、同法人のインタビュー調査によれば、そもそも彼らが学業不振に陥るきっかけは人間関係にある。人間関係がうまくいかないとキャンパスから足が遠のき、その結果として学業不振に陥るという構図が見られる



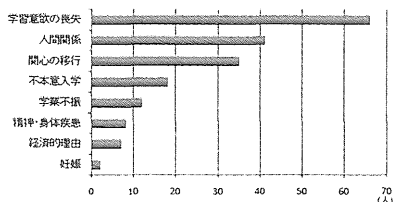
【図6】友人や仲間といるときに充実感



【図7】学校生活に対する満足度



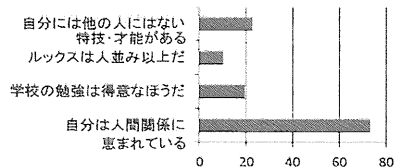
【図8】不登校になった理由



【図9】大学生の中退理由

というのである。

浅野智彦（2011 a）らの研究グループが2010年に行なった大学生の意識調査でも、【図10】が示すように、自己評価において人間関係の占める割合は非常に大きい。彼らの生活満足感の高さに、この自己評価が大きな影響を与えていること



【図10】大学生の自己評価

は間違いないだろう。当然ではあるが、彼らは、地縁や血縁といった伝統的な共同体だけでなく、自由意思で作り上げていく人間関係をも非常に重視し、生活に対する満足の基盤をそこに見出しているのである。

ところで、共同体とは、血縁のような生物学的な類似性や、地縁のような空間的な近接性だけで成立するものではない。固定的な人間関係から生まれる価値観の同質性が、その存続に大きく寄与している。異なった人たちが利害を調整し、共存を目指す関係が公共性だとすれば、似た人たちがそれを根拠に集まり、支えあいを目指す関係が共同性である。伝統的な社会において、その価値観の同質性を保つための基盤として血縁や地縁が有効だったのは、その縁の境界を越える人口移動がまだ稀だったからである。A・ギデンズ（1993）の表現を借りるなら、人びとの日常は、地縁や血縁のなかに「埋め込まれて」いたのである。

そのような事情は、職場や学校のような機能集団においても同様である。まだ成長初期の段階にある社会では、人びとの欲望はさほど細分化されておらず、かなり一般性を有している。実現すべき目標がまだ彼岸的なものだからである。このように、みなが同じ方向を向いており、目標の共通項が大きい場合には、個人で目標を追求するよりも、集団で目標を追求するほうが効率的である。また、彼岸的な目標の実現には、費やされる労力への長期的な投資も必要である。

そのため、目標を追求する集団の構造は安定し、強い拘束力を持つようになる。逆に、集団のその拘束力の強さが、目標追求への効率性を高め、長期的な投資の安定性を保証してくれる。この点について、D・リースマンはこう述べている（1964：103）。「星は、はるか彼方に輝いている。しかし、それを眺めている個人は、それに向かって自分の全生涯をかけて働きつづける。人間の人生といったような、かなり長い時間軸で星に向かって働きつづけるということが、彼にとって可能であったのは、目標というものが一般性を持っていたからだ。」

しかし、近代化の進展とともに社会は急激に成長拡大し、人口移動率も大幅に上昇する。その過程で人びとの価値観も多様化していく。同じ景色を眺め、同じ対象を崇め、同じ関係を生きる経験が失われ、多種多様な環境を生きるようになるからである。また、社会が成熟するにつれて、人生の目標がたんに物質的に豊かな生活の実現ではなくなり、精神的に充実した生活を求めるようになるからでもある。前者の目標がかなり一般性を有していたのに対し、後者の目標は人によって千差万別である。

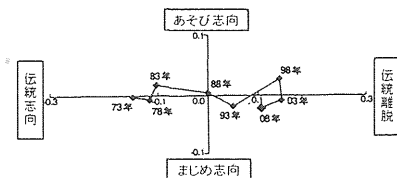
このように、近代化の進展の結果、共同体の成立基盤は徐々に崩壊し、機能集団もまたその拘束力を弱めていくことになる。再びギデنزの言葉を借りるなら、固定的な人間関係からの「脱埋め込み」が進行するのである。大戦後の我が国で、このような変化が劇的に進化したのは、おそらく高度成長が成し遂げられた1970年代以降のことだろう。

★かつて学齢期の若者たちは、抑圧的な学校文化の下で多様性を否定され、画一的な檻のなかへ囲い込まれていた。したがって、その学校に居場所を見つけられない者は、たとえば非行グループなどを形成することで自ら居場所を確保し、また連帯して学校文化に立ち向かおうとしていた。当時の世代間ギャップの大きさも、それを後押ししていた。しかし、今日の若者たちは、多様性を奨励するようになった新しい学校文化のなかを生きている。そして、多様性が称揚される時代には、従来のような価値の序列性も失われる。個性的な生き方が称揚される社会では、評価の物差しも多面的にならざるをえない。

★こうして、各自の個性に応じた多様な生き方が積極的に認められるようになると、彼らは自らの居場所を独自に確保する必要に迫られなくなり、外圧を失った人間関係は緩やかなつながりへと変質していく。世代間ギャップの縮小と相まって、大人や社会といった共通の敵を失ったピア・グループは相対的に弱体化し、若者たちはその内圧からも解放されたのである。このような変化は、若者集団に対する「〇〇族」から「〇〇系」へという呼称の移り変わりにも反映されているだろう。しかし、後ほど指摘するように、それがピア・グループ内における「不安の高まり」という新たな問題を生み出すことになる。

●流動化する人間関係

NHK放送文化研究所による調査には数多くの質問項目が含まれているが、それらへの回答を「林の数量化」を使って統計処理し、相互の関係を整理してみると、操作的に2つの概念が導き出される。そして、それぞれの調査年ごとに回答結果を総合した平均得点を算出し、その2



【図11】日本人の価値意識の推移（全体）

軸からなる平面上にマッピングしてみると【図11】のようになる。この図では、時代による推移を見やすくするため、平均得点を記したドットを調査年の順番にトレースしてある。

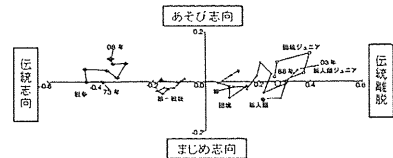
ここで導き出された2つの軸は、調査項目の分布状況から推論された結果、それぞれ〈伝統志向－伝統離脱〉と〈まじめ志向－あそび志向〉と名づけられている。そのネーミングから想像されるように、前者の軸は、伝統的な制度規範へコミットする度合いが強い、あるいは近代的な自由感覚を多く有する度合いが強いを示しており、また後者の軸は、未来や他者に傾倒した目標志向性が強い、

あるいは現在や自己に傾倒した快樂志向性が強いかを示している。

この図を眺めると、日本人の意識は、1973年から2003年まで時代を下るにつれて、〈伝統志向－伝統離脱〉を示す横軸を左から右へと移動してきたことが分かる。その変化幅の大きさと方向の恒常性は、〈まじめ志向－あそび志向〉を示す縦軸方向での変動の比ではない。もっとも、2003年から08年にかけてはその方向が反転しはじめているが、その含意については後に触れたい。とりあえずここで確認しておくべきなのは、1970年代以降、伝統志向から伝統離脱へと日本人の意識が大きく動いてきたという点である。

1970年代以降、私たち日本人は、伝統的な制度規範へコミットする度合いを弱め、従来のしきたりに縛られない自由な価値意識を持つようになった。その結果、かつて共同体が有していた強い拘束力は、徐々に弱まっていった。また、学校や職場のような機能集団においても、その人間関係が自由化されていった。そして、その自由化された人間関係は、人びとの価値観をさらに多様なものへと後押しする。こうして、人間関係の流動化がますます加速されていったのである。

ちなみに【図12】は、【図11】をおよそ15年ごとの世代に分けて図示しなおしたものである。この図を見ると、伝統志向から伝統離脱へという日本人の意識の変化は、じつは世代によってかなり異なったパターンを描いていることが分かる。それと同時に、各世代の軌跡の分布



【図12】日本人の価値意識の推移(世代別)

状況に着目すると、古い世代ほど世代間の距離が遠く、新しい世代ほど世代間の距離が近くなっていることにも気づく。もっとも若い「新人類ジュニア世代」になると、その親世代に当たる「新人類世代」と軌跡がほぼ重なっている。

この分布状況からいえるのは、新しい世代に近づくほど互いの意識の差が小さくなっており、もっとも若い世代では、その前の世代とほとんど違いが見られないという事実である。しかも、多様な生き方や考え方を積極的に認める伝統離脱の方向で、双方が等しい価値観を共有するようになっていく。先述したような世代間ギャップの縮小は、この調査データからもうかがい知ることができる。

古い世代と新しい世代の間に意識のギャップがあれば、どちらを優先させるかをめぐって対立も生じうる。特定の生き方しか認めない伝統志向的な意識が支配的なならなおさらである。じっさい、かつて見られた世代間闘争はそういうものだった。それは、利害をめぐる争いというよりも、価値観をめぐる争いだった。しかし、この図が示すように、そもそも双方の間に意識のギャップが見られなくなっているのなら、しかも、多様な生き方を互いに認めあう志向性を強めているのなら、価値観の覇権をめぐる争いはもはや生じえないことになる。

もちろん、このような事態は、制度的な共同体だけで進んできたのではない。結婚という制度の前提から解放されて恋愛が自由化したように、友だち関係のよ

うな自発的に作り上げられる共同体についても同様に当てはまる。かつては、同じ地域の住民だから、同じ学校の生徒だから、同じ部活の一員だからといったように、制度的な集団に同じく属することが、友だちや仲間の関係を支える上で大きな基盤となっていた。いまでも関係を作る最初のきっかけは当時と大して違ってないが、しかしその後の関係を維持していく上で、制度的な基盤が果たす役割は大幅に小さくなっている。

たとえば、学齢期の若者たちは、同じクラスメイトだからといって、自分と気の合わない相手と無理に付きあう必要はないし、同じ部活の先輩だからといって、その意向に無理に合わせる必要もない。集団の拘束力が弱まり、そう考える若者たちが増えている。自分が好まない相手との関係に無理に縛られることがないのだから、人間関係に対する満足度が上昇してくるのは当然のことだろう。

抑圧的な人間関係が若者たちの前に立ちはだかり、彼らが抱えている飛躍への意思を妨げようとする。そんな状況が消えていったのは、地縁や血縁といった制度的な共同体の拘束力が低下し、また友だちや仲間といった自発的な共同体の拘束力も低下したからである。地域のなかで、家庭のなかで、また友人関係のなかで、若者たちが抑圧され、鬱積を抱えることは少なくなった。自分の生き方を親が認めてくれずに特定の価値観を押し付けてくる。あるいは自分の思いを友だちが受け留めてくれずに一方的に非難される。そういった不満を募らせる若者たちが減り、相手に反発を覚えることも少なくなってきたのである¹¹⁾。

このように、昨今の日本では、制度的な集団の拘束力が弱まり、人間関係の流動化が進んでいる。私たちの人間関係は制度的な枠組に縛られなくなり、各自が自由に関係を営むことが容易になっている¹²⁾。その結果、自分の意思に反した人間関係に縛られることが少なくなり、地縁・血縁のような共同体に対して強い愛着感を覚え、あるいは友人や仲間に対しても高い充実感を覚えるようになった。人間関係に対する満足度が上昇してきたのはそのためである。

3. 人間関係の「不満」から「不安」へ

●人間関係のリスク化

前節で考察したように、さまざまな共同体や機能集団の人間関係で流動性が高まると、当然ながらその関係への満足度も上昇することになる。辻泉(2006)は、今日の日本で進行しつつあるこのような人間関係の流動化を「自由市場化」と形容している。しかし、関係の自由化とは、裏を返せば、かつてのように制度的な基盤が人間関係を保障してくれなくなったということでもある。

自分が好まない相手との関係に無理に縛られることがないという事情は、じつは相手の側もまた同様である。関係が自由化してくると、たとえ同じクラスメイトだとしても、相手が自分と付きあってくれる保障はどこにもなくなるし、たとえ同じ部活の先輩だとしても、相手がいつも自分を守ってくれるとは限らなくな

る。自分が相手を自由に選択できる自由は、自分が相手から選択されないかもしれないリスクとつねにセットになっている。

このように、人間関係が自由化すると、人間関係を紡いでいくときの基盤として、制度的な枠組がかつてのようには機能しなくなっていく。したがって、自分が望む人間関係を思いどおりに得ることができないかもしれないリスクも増大していく。雇用をめぐる規制緩和は、より良い職場環境を求めて労働者が自由に転職しやすい環境を用意したが、雇用主の都合でいつリストラの対象にされてもおかしくない状況をも同時に生み出した。人間関係をめぐる規制緩和についても、それと同様のことがいえるのである。

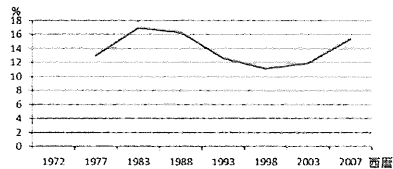
かつて、T・パーソンズ（1974）は、このような相互依存状況をダブル・コンティンジェンシーと呼んだ。近代化が進み、制度的な規範が弱まれば弱まるほど、このような状況に遭遇する機会は増えていく。とりわけ我が国では、成長社会から成熟社会へと移行した1990年代以降に、この傾向が急激に加速した。そして、制度的な枠組から切り離されて自由化した人間関係は、流動的な種々の条件によって、その濃淡も幅も大きく左右されるようになる⁽³⁾。

世界青年意識調査によれば、【図13】が示すような家族との関係にせよ、あるいは【図14】が示すような友人や仲間との関係にせよ、満足度の上昇とともにいったん悩みや心配ごとの対象ではなくなっていた人間関係が、1990年代後半から再び悩みや心配ごとの対象と感じられるようになってきている。これは、おそらく彼らのリスク感覚の高まりを反映したものでろう。

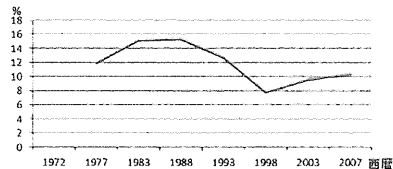
今日では、地縁・血縁のような共同体においてであれ、あるいは学校や職場のような機能集団においてであれ、「不満」に由来していたかつての悩みや心配ごと

は減ったが、それに代わって「不安」に由来する悩みや心配ごとが増えている。このように、自由とリスクはつねに表裏一体の関係にある。人間関係の自由化は、いわば天国と地獄の両面をあわせ持っている。辻の言葉を借りるなら、「対人満足社会」は、同時に「対人恐怖社会」ともなりうるのである⁽⁴⁾。

もっとも、人間関係をリスクの高いものとみなす傾向が強まっている背景は、人間関係の自由化だけではない。そもそも制度的な集団の拘束力を弱め、人間関係を流動化させてきたのは、先ほど検討したように、〈伝統離脱〉志向を強めてきた日本人の価値観の多元化だった。現在の日本では、かつてより多様な生き方が積極的に認められるようになり、人生の選択肢は確実に広がっている。男子な



【図13】悩みや心配ごととは家族のこと



【図14】悩みや心配ごとの友人や仲間のこと

ら良い学校へ行って良い会社に入らなければならないとか、女子なら適齢期に結婚しなければならないとか、そういった社会的な圧力は、まだ完全に消え去ったわけではないが、かつてより確実に下がっている。しかしそれは、かつてのように安定した人生の羅針盤を所有しにくくなったということでもある。

明確な評価の物差しが社会に存在していた時代は、自分の内面に取り込んで自己評価の拠り所とするにせよ、あるいは非行少年のように反発の対象として措置するにせよ、いずれにしてもそれを標準器として利用することで、若者たちは自己確認の基盤を確保することができた。自分の信念に従って生きているつもりでも、その信念の根拠は、じつは単なる自身の思い込みなどではなく、社会的な価値基準との関係で客観性を担保されていた。だからこそ、それは、つねに一定の方向を指し示す人生の羅針盤となりえたのである。

このように、安定した人生の羅針盤が個人の内面に存在していた時代には、人びとはそれを判断の拠り所にすることで、所属する集団の人間関係に強く縛られながらも、そこから受ける自己評価を相対的に軽く扱うこともできた。その評価を過剰に気にかけることもなく、場合によっては「自分の信じる道を行く」と反発し、孤高にふるまうこともできた。自分が進んでいる方向は正しいはずだと確信していたので、たとえ今は周囲の人たちに理解されなくても、いずれは分かってもらえるはずだと素朴に期待をかけることができたのである。

ところが、今日のように価値観が多元化してくると、自分がどんな選択肢を選んだとしても、それを選んだことに安定した根拠を見出せなくなってしまう。別の選択肢の可能性がいつまでも意識のなかに残り、いま自分が選んだものが絶対的だとは思えなくなる。このとき、人びとは、身近な他者の評価にすがること、自らの選択の客観性を少しでも確保しようとする。自らの判断が妥当であったことの根拠をそこに求めようとするのである。

今日では、つねに場の空気を読んで、周囲の人たちの評価を確認していかねければ、いま自分が向かっている方向は本当にこれでよいのか確実な保証を得ることができなくなっている。自分が進むべき方向についてつねに迷い、絶えることのない不安を抱え込んでいる。リースマン（1964）が「他者指向型」と呼んだように、人生の羅針盤に代わって対人レーダーを作動させ、周囲の反応を探りつけ、それを自分の物差しにしていかがるをえなくなっているのである。

●希求される生来的な関係

かくして、価値観の多元化が進むにつれ、人間関係は大きなリスクをはらみ、不安に満ち溢れたものと感じられるようになる。しかし、それなくしては生きていけない。このとき、リスクを減じるもっとも現実的で手近な方法は、できるだけ価値観の似通った者どうしで関係を築くことだろう。期待されている他者とは自分の拠り所となってくれるものだから、できるだけ自己承認を得やすいように立場の近い相手を求める傾向が自ずと強まってくるのである。

今日の人間関係では、あらかじめ客観的な評価の物差しが存在しているわけではないから、相手が自分に対してどんな評価を与えてくれるか、前もって予想することが難しい。その評価は、場の空気で簡単に変化してしまうことも多い。承認を得られるか否かは、その場になってみなければ分からず、評価された結果を待って初めて判断せざるをえない。したがって、具体的に身近な他者に対して、そして個別の人間関係に対して、自己の依存度はますます高いものになる。そのため、少しでもその不安を和らげようと、できるだけ人間関係に安全パイを求め、自分と同じ価値観の人間とつながろうとする傾向を強めていく⁽⁵⁾。

しかし、価値観の似通った者どうしで形成される集団にも、互いを承認しあうときの明確な判断基準が存在しないという点では、依然としてリスクは残ったままである。絶えざる不安を呼び起こす構図そのものは克服されていない。このとき、彼らにとって、さらに安全に自分の居場所を確保する方法は、価値観よりも不変不動で揺るぎないと考えられる生来的な属性にすがることだろう。こうして、生来的な関係に由来する根源的な仲間探への欲求が強まっていくことになる。

生来的な属性は、価値観がいくら多元化してもけっして揺るがない明確な基準となりうる。自己選択の結果ではないからである。自分が生まれた場所に依拠する地縁や、自分が生まれた親族に依拠する血縁は、自分の意思では変更不可能な人間関係だからこそ、そこへの思い入れが強まっていくのである。ネット右翼と称される新たなナショナリズムが、人数としては少ないながら一部の若者に見られるのも、その表われの1つといえるだろう。日本民族という集合体は、もっとも大きく、それゆえにもっとも盤石な、地縁と血縁を兼ね備えた共同体と感じとられているのである。

これは、宿命主義な人間関係への憧憬の高まりといってもよい。生まれつきの属性が人間関係を規定してくれ、それゆえに選択の自由にとまなう不安から逃れられるかのように感じられている。このように、現在の日本では、とりわけ若者の間では、伝統的な共同体に再埋め込みされたいという願望が強まりつつある。先ほど指摘したように、【図11】では、それまで伝統離脱へと変化していた精神構造が、2003年から08年にかけて、初めてその方向を反転させはじめていた。この反転現象には、おそらく以上のような含意があるのだろう。

近代化にともなって人間関係の「脱埋め込み」が進行すると指摘したのは、すでに述べたようにギデンズだった。しかし彼は、その人間関係の不安定さを耐えがたく感じる人びとが、親密性の再埋め込みを次第に求めるようになる可能性についても言及している。柴田悠（2010：133）は、その指摘から示唆を受けて、次のような仮説を提起している。「脱埋め込み」された親密性は、特定の時空間から独立しているため、流動的であり不安定である。ならば、近代化によって相互行為がより流動化し親密性がある程度「脱埋め込み」されてしまうと、個人は、親密性の安定化を求めて、「脱埋め込み」された親密性を特定の時空間（近隣や家庭など）にあえてふたたび従属化させる（「再埋め込み」する）ことも、次第

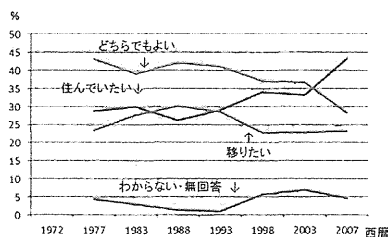
に重要視するようになるのではないか。」

柴田は、この仮説にもとづき、国レベルでの近代化と親密性の関係について統計的な解析を行ない、近代化にともなう人間関係の変化を分析している。そこから得られた知見によると、近代化の低い段階では、人びとの親密性は「脱埋め込み」へと向かう傾向がはっきりと表われるが、近代化の高い段階では、そのような傾向が次第に薄れてくる。そして、それに代わって今度は、再埋め込みの重要度が次第に高まってくる。すなわち、制度的な共同体への包摂という伝統志向的な感性の復活をそこに見てとることができるのである。

そうしてみると、先ほど指摘したように、家族といるときに充実感を覚える若者や、地域社会に愛着を抱く若者が、このところ上昇の傾向にあるという事実は、たんに共同体に不満や反発を覚える若者の減少を示しているだけではないだろう。制度的な枠組に保障された人間関係を、むしろ積極的に希求する若者が増えていることを示しているともいえる。

かつての若者たちは、もちろん働き口を求めてという切実な理由もあっただろうが、それとともに都会生活の華やかさと人間関係の気楽さへの憧れから、また地域社会の人間関係の鬱陶しさへの嫌気から、生まれ育った地域を離れて都会へ出ることを夢見ていた。ところが現在は、そもそも若年層の多くはすでに都市郊外を生まれ故郷としている。しかも、そこには全国津々浦々まで大型ショッピングモールが整備され、都心とほぼ変わらない消費生活を送ることができるようになってい。さらには、窮屈な因習を押し付けてくる口うるさい大人たちも地元には見当たらなくなった。

このような事情を踏まえて近年の若者たちを眺めるなら、彼らの間で地元つながりへの憧憬が高まっていることにも合点がい。じっさい、【図15】が示すように、世界青年意識調査によれば、近年、現在の地域に今後も住みつづけたいと考える若者たちは確実に増えている。彼らが制度的な共同体への再埋め込みを求めはじめたとき、現実の地域社会はすでに衰え、独自の規範や文化も空洞化してしまっていた。しかし、それゆえに、彼らが理想とする共同体を築いていきやすいフロンティアとしての環境が、皮肉にもそこには整っていたのである。



【図15】現在の地域に今後も住みつづけたい

●擬似的共同体への没入

再埋め込みを希求する若者たちが現実には紡いでいる人間関係は、あくまで人間関係の係留点として役立つ限りにおいての地元つながりである。そこに、世代をまたいだ人間関係が現実には復活しているわけではない。すなわち、伝統的な共同

体がリアルに復活してわけではない。それは、あくまで人間関係の係留点として役立つ限りにおいて仮構された共同体である⁶⁾。

したがって、かつての伝統的な共同体とは違って、そこには自らの自由意思を妨げる外部的な制約が存在していない。生来的な属性に由来した地縁や血縁といえども、もし、その関係に嫌気が差した場合には、いつでも離脱することのできる共同体である。それは、いわば柔らかな共同体といってもよいものである。

しかし、そのような共同体は、真の意味での共同体とはいえないだろう。大澤真幸（2005）の巧みな表現を借りるなら、その共同体の内部に立ち現われてくる他者とは、「脅威とならない限りで、予想外の攻撃性や暴力性を発揮しない限りで、つまりは他者らしくふるまわない限りで、その存在を許されている」からである。すなわち、柔らかな共同体は、「他者（性）抜き他者」によって構成されている。したがって、そこでは、現実の他者から他者性を抜き去るために、さまざまなコミュニケーション・テクニックが駆使されることになる。いつでも自由意思で簡単に離脱できる共同体のなかでは、かつてのような制度的な枠組は、人間関係の基盤としては有効に働かないからである。

ところが現実には、そういったコミュニケーション・テクニックほど、その技量が他者の反応に依存するものはない。コミュニケーションとは、その原理的な性質からして、けっして自己内で完結するものではなく、つねに他者の反応との函数だからである。コミュニケーション能力を円滑に発揮できるか否かは、自分が対面している他者のあり方に大きく依存している。

こうして、彼らは、他者に対する依存度をますます高めながら、濃密さと安定さが偽装された人間関係を際限なく求めつづけていく。鈴木謙介（2007 a）の言葉を借りるなら、そこでは「本来あるべきだと思える共同体的な生き方を、個人の意志で選ぶ」という逆説的な事態に陥るからである。だから、濃密で安定した人間関係を追い求めつづけているのに、どこまでいってもその到達点が見えてこない焦燥感に駆られるようになるのである。

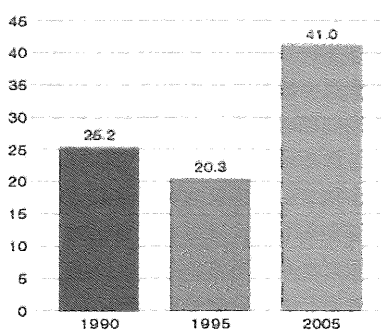
このような状況の下では、人間関係への不満感はますます顕在化しにくくなるだろう。人間関係に反発を覚え、そこからの離脱を目論むのではなく、むしろ逆に憧憬を覚え、さらに包摂されることを望むようになっていく。なぜなら、柔らかな共同体が虚構の共同体であることを知りながら、あたかも真実の共同体であるかのようにふるまえるのは、その虚構をリアルであるかのようにふるまう他者が存在するという事実依存しているからである。その他者の態度こそが、擬似的な共同体のリアリティを支える基盤となっているからである。

たとえば近年は、若年層にヒットしたアニメ映画「サマーウォーズ」に描かれていたような、田舎の旧家の巨大な親族共同体に対して、鬱陶しくて息苦しそうだと忌避感を覚えるのではなく、暖かくて心地良さそうだと羨望のまなざしを向ける若者が増えている。しかし彼らは、それがリアルな共同体ではないことを百も承知である。すなわち、虚構を現実と混同して憧れているのではなく、虚構に

真実らしさを与えうような関係に憧れているのである。したがって、そのような状況下では、親密な関係の内部で生じる軋轢は、当然ながら顕在化しにくくなるだろう。具体的な人間関係から真実らしさのメッキが剥がれていくことに対する不安が、それを抑制していくのである。

このように、今日の若年層では、関係上の困難を極端に恐れる人びとが増えているから、たとえ経済的な利得があったとしても、関係を損なうような行為は忌避される傾向が強い。また、奥田知志（2010）が「関係の困窮は生活の困窮につながる」と指摘するように、関係上の困難は、たとえば人脈のような社会関係資本の欠如を招き、したがってそれが経済上の困難も引き起こすことを、今日の若者たちはよく知っている。だから、仮に功利的な動機があったとしても、関係を損ないそうな行為は慎重に回避されるのである。

大竹文雄（2011）は、世界価値観調査のデータを引用しながら、近年、日本人の価値観が大きく変容してきたと指摘している。【図16】が示すように、1990年代までの日本人は、そのほとんどが、人生で成功するためには勤勉が大切であると考えていた。しかし、2000年代に入ってから、運やコネが大切であると考えて人びとが半数近くまで増えている。その結果を彼が独自に年齢別で分析してみたところ、とくに若い世代のほうがその傾向が強く見られたという。



【図16】勤勉よりも運やコネが大切

このように、関係から排除されては生計を立てることもできないという考え方が、今日では広く浸透している。R・マートン（1961：138）が指摘するように、「肝心なことは、何を知っているかではなく、誰を知っているかということ」なのである。かくして、生来的な共同体への渴望は、たんに彼らの人間関係だけでなく、その人生観へも影響を及ぼしていくことになる。

4. 宿命主義的な人生観と希望格差

●深化する「希望格差」

第1節で述べたように、学校とは、同じ世代の人間との関係を育んでいく場であると同時に、社会的に称揚される文化目標を内面化し、その達成手段を獲得する場でもある。しかし近年は、若者たちの学力低下が問題視され、またその背景には貧困問題の深刻化が潜んでいると指摘されている。じっさい、文部科学省に委託された専門家会議の調査研究によれば、子どもの学力と世帯収入との間には正の相関が見られる。

それにもかかわらず、これもまた第1節で述べたように、学校生活に対する満足度は、1970年代からほぼ一貫して増加の傾向にある。当の若者たちの間で、自己評価に対して学力の占める比重が低下していることは、先ほど【図10】で示した浅野らの調査結果からもうかがえるだろう。では、彼らが学力を重視しなくなってきたのはなぜだろうか。

山田昌弘（2004）は、1990年代後半に若年層の凶悪犯罪が増加した背景に、彼らの世代内で生じている希望格差があると指摘する。自らの未来に対する絶望感の高まりが、彼らの逸脱行為を促すようになっているというのである。たしかに、当時の犯罪の増加傾向が今日までその後もずっと続いていれば、そのような可能性もありえただろう。

しかし、現在は、失業率のさらなる悪化などを受けて、若年層の希望格差は当時よりも深刻化しているはずなのに、本論考の冒頭で指摘したように、少年犯罪はけっして増えていない。むしろ2003年からは、減少の一途を辿っている。だとすれば、若年層の希望格差は、非行の発生率を促進するどころか、むしろ抑制しているとすらいえるのではないだろうか。

これはけっして皮肉を述べているのではない。希望格差は、山田がそれを考察の対象とした当時は、確かに閉塞感を募らせるような性質のものだったのだろう。しかし現在は、むしろ逆に現状に対して納得感を与えてしまうものへと、その性質を変えているように見受けられる。人びとの現状認識に対して、希望格差の果たす役割が大きく変質しているのである。

現在、自分の置かれた社会的な境遇に対して、他者との間に落差を覚えているとしても、その立場に置かれていることに自らが納得してしまえば、すなわち、社会的な資源が不平等に配分され、劣悪な立場に置かれていたとしても、それに見合った程度の希望しか配分されていなければ、その状態に対してフラストレーションを感じることはない。むしろ逆に、希望に格差がなく、平等に配分されているほうが、かつてマートン（1961）がアノミー概念を用いて説明したように、フラストレーションを高める状況を作り出すことになる。

マートンによれば、問題行動の促進要因となるのは、貧困状態から生ずる経済的な困難そのものではなく、社会的な格差から生じるフラストレーションである。そして、彼が明らかにしたように、社会的格差からフラストレーションが生じるのは、たとえばアメリカ合衆国のフロンティア・スピリットのように、「煽りの文化」がそこに介在するからである。だとすれば、たとえ格差があったとしても、そこに「煽りの文化」が介在しなくなれば、フラストレーションを感じることもないはずである。おそらく現在の日本で進行しつつあるのは、このような事態なのではないかと推測される。

西田芳正（2010）は、近年の貧困家庭の子どもたちには、自らの境遇に対して違和感や反発を覚えるというよりも、むしろそれをごく「自然な」こととして受け入れる傾向が強くなっていると指摘する。「そこには、勉強がわからない、学

校で成功できない、貧しい暮らしから逃れたいのに見通しが立たない」といった「不満や反抗」の様相は見られず、「希望を持てずどうでもよくなって」妊娠、出産する女性の姿もない。外の世界から見れば、親と同様の不安定で困難の多い生活を、そうと気づかないままに自ら引き寄せ…なじみのある、見慣れた生活、自ら希望した生活に向かって進む大人への移行過程」が見受けられる。

このように、貧困家庭の子どもたちは、希望を持てない状況というよりは、希望を持たない状況に置かれている。できれば高い希望を抱きたいのに、現状ではそれは無理だと判断して悲観的になるのではなく、そもそも高い希望を抱こうなどとは端から思ってもいないから、現状に対して強い不満を覚えることもない。山田が希望格差と呼んだのは前者の状況だったが、現実の希望格差はさらに後者へと深化しているのである。

マートンは、人びとが自己評価を行なうさいに、その基準点として使用する集団を準拠集団と呼んでいる。そして、その準拠集団をどこに求めるかによって、人びとが覚えるフラストレーションは大きく異なってくると指摘する。たとえば、彼が言及しているアメリカ兵の意識調査では、航空隊の兵士は憲兵隊の兵士よりも一般に昇進が早いにもかかわらず、自らの境遇に対する不満度が高い。それは、自分と同程度の教育レベルなのに、自分より地位の高い兵士が多いからである。逆に、憲兵隊の不満度が低いのは、自分と同程度の教育レベルなのに、自分より地位の低い兵士が多いからである⁷⁾。それと同様に、昨今の貧困家庭の子どもたちは、自らと境遇を同じくする者たちだけを準拠集団として想定するようになっている。そして、自分の置かれた現状をごく「自然な」ことと思っていれば、そこにフラストレーションが生じることもないはずである。

では、今日の少年たちに、希望の格差配分が疑念なく受け入れられているのはなぜだろうか。貧困家庭の子どもたちだけでなく、かつてより劣悪な生活環境に置かれている若者たちの多くが、その現実を受け入れてしまい、そこから抜け出して上昇したいという強い欲求を抱かないのはなぜだろうか。それを可能にしている「鎮めの文化」とは、いったい具体的にどのようなものなのだろうか。

●宿命主義的な人生観の復活

荻谷剛彦（2001）が行なった高校生調査によると、1990年代以降の学校では、「がんばれば必ず成功する」と考える生徒と、「何をやっても無駄だ」と考える生徒の間で意欲の二極化が進んでいるという。荻谷は、これをインセンティブ・デバイドと呼んで、かつての平等主義的な教育理念が放棄された後に、出来る生徒と出来ない生徒の学力格差が広がっていると警鐘を鳴らしている。

学力格差が拡大しているなら、出来ない子の側のフラストレーションはそれだけ増大し、彼らの逸脱行動も増えていておかしくないはずである。確かに、1990年代後半から2000年代初頭にかけては、一時的に少年犯罪が増加した時期もあったから、この格差拡大の影響があったのかもしれない。しかし、その後、格差は

縮小していないにもかかわらず、少年犯罪のほうは減少傾向へと転じている。

前節で引用したように、世界価値観調査の結果によると、2000年代に入ってから日本では、人生で成功するためには運やコネが大切であると考える人びとが半数近くに増えている。大竹の分析では、その傾向はとくに若い世代で顕著だった。この調査結果が示しているのは、たんに人間関係を重視するようになったというだけではなく、人生とは自らが努力によって切り開いていくものではないという感覚が、すなわち自分の力の及ばないところで決まっているという感覚が、とくに若年層の間で広まりつつあるという事実ではないだろうか。じっさい、読売新聞が2003年に発表した「全国青少年アンケート調査」では、じつに75%の人びとが「努力しても成功するとは限らない」と回答している。

また、先ほど引用した浅野らの調査によれば、【図17】が示すように、「未来の自分」よりも「過去の自分」に拠り所を求めようとする若者のほうが、今日では多くなっている。これからいかようにも形成可能な自分の姿を思い描きながら現在を生きるのではなく、すでに過ぎ去った変更不可能な自分の姿を振り返りながら現在を生きている。現在の生き方を規定するのは、未来ではなく過去なのである。彼らは、あえていうなら未来志向ではなく過去志向だといえる。

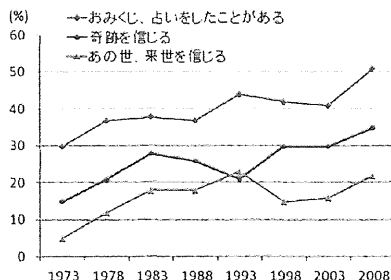
これらの調査結果を重ね合わせて推察すると、近年、大流行しているスピリチュアル・カウンセリングを求める人びとの感覚もよく理解できるだろう。そこには、自らの前世やオーラといった変更不可能なものによって自分の人生が規定されているという発想が見て取れるからである。それと類似したパワースポット巡りも、自らの霊性という根源的で不変なものを感じさせてくれる場所を求める行為といえる。そんな若者は一部にすぎないと思われるかもしれないが、NHK放送文化研究所の調査結果によれば、【図18】が示すように、近年は「奇跡」を信じる者も「あの世や来世」を信じる若者も増えているのである。

また、そんな非科学的なものに疑念を覚える人たちも、じつは科学的な根拠に乏しいといわれるポップ脳科学の虜となり、さまざまな「脳力」の発掘に取り組んでいる。それは、現在の自分を鍛錬することでさらに力を伸ばしていこうという発想ではなく、むしろ潜在的に眠っているはずの力を呼び醒まそうという発想である。そこには、具体的な関心の持ち方は異なっているものの、スピリチュア

■ 過去を振り返って、いろいろと思いげししながらすごしている
■ いま現在の充実感をもっとも大事にしながら生活している
■ よい未来を迎えられるよう、それに向けて努力をしている
■ 何かを深く意識することもなく流れるまま日々を暮らしている
□ 欠損値



【図17】大学生の普段の生活態度



【図18】20歳代の宗教意識の変化

ルな若者たちと共通した感性がうかがえる。すなわち、自由意思で主体的に選択されたものとしてではなく、生まれもった資質に運命づけられたものとして、自分の人生を理解しようとする感性である。

そうしてみると、インセンティブ・デバイドと呼ばれる意欲の格差も、「生まれもった素質によって人生は決まる」という感覚が表われたものといえるのではないだろうか。さまざまな環境要因が有効に働いた結果、いま現在、高い学力を身につけている生徒たちは、そのことで自信を得ることができ、そもそも自分は最初から成功する運命にあると確信しうる状況にある。だから、さらに高い学力を求める意欲も出てくるのだろう。

しかし、裏を返せば、いま現在、学力の低い生徒たちは、それを必然的な状態とみなすことで、ますます自信をなくし、そもそも自分は最初から報われない運命にあるのだと確信してしまうことにもなる。彼らが努力する意欲を持てず、自らの人生を端から諦めているように見えるのは、おそらくそのためではないだろうか（#8）。人生の行方はあらかじめ定まっていると考えている点では、学力の高い生徒も、あるいは低い生徒も、どちらも同じ心性の持ち主なのである。

このように、現在の若者たちの間には、宿命主義とでも呼ぶべき人生観が広がりつつある。それが前近代的な宿命主義と異なっているのは、理不尽な身分制度によって抑圧され、やむなく希望を諦めているのではないという点である。生まれもった素質という絶対的で本質的なものによって、一見すると合理的に自分の人生が定まっていると考えられているという点である⁹⁾。

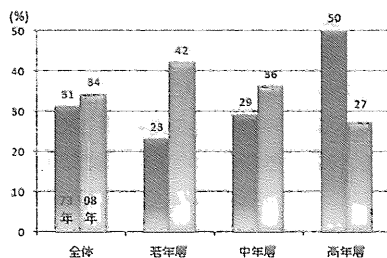
日本人の精神構造は、【図11】が示していたように、1973年から2003年まで時代を下るにつれて、〈伝統志向〉から〈伝統離脱〉へと大きく変化してきた。そんな価値の多元化状況のなかで、自己の確固たる投錨点を探しつづけた結果、ついに辿りついた先が宿命主義だったのではないだろうか。前節で考察したように、社会的価値からの脱埋め込みが人生の羅針盤を見失わせ、結果として自己の不安を増大させてきたため、再度の埋め込みを求めるようになったのである。

先ほど指摘したように、現在の若者たちは、伝統的な人生の羅針盤に代わるものとして、他者から受けとる自己承認によって自己を安定させようとしている。しかし、そのような代替物では、じつは真に安定した人生の羅針盤としては機能が不十分である。価値の多元化状況のなかでは、それは揺らぎを孕んだものにならざるをえないからである。

振り返ってみれば、生得的属性のくびきから人びとを解放し、獲得的属性によって人生を選択できる世界にしようというのが、これまで私たちの目指してきた近代の理想だった。自由にせよ、平等にせよ、それを実現するための思想だった。だとすれば、この新たな宿命観は、その近代からの撤退の始まりを示しているともいえるだろう。宿命とは、人生選択の自由が平等に開かれていない状態を指しているが、現在は、そのように反転した価値観に魅力を感じる人びとが徐々に増えはじめてるのである。

●希望格差という適応様式

近代化のなかで伝統的価値からの解放を目指してきた日本人は、ここに至って、再び伝統的価値へ埋め戻されることを望むようになっている。しかも【図11】を世代別に集計しなおした【図12】を見ると、その傾向はとくに若い世代で顕著なことが分かる。さらに同様の現象は、同調査による【図19】の宗教意識の変化からもうかがい知ることができる。かつては「信心深いのはお年寄り」といわれていたが、今日ではむしろ「信心深いのは若者」なのである。



【図19】お守りやお札を身近において信じる

第1節で示したように、NHK放送文化研究所の調査によれば、生活全般に対する満足感は、現在に近づくにつれて若い世代ほど高まる傾向にあった。若者たちの置かれた社会状況が好転しているわけではないのに、彼らの満足度がこれほど高い数値を示しているのは、希望の格差配分を疑念なく受け入れる素地を有しているのは、先述したように、自らと境遇を同じくする者だけを準拠集団として想定し、そこに安住してしまう傾向が強いからだろう。

そして、おそらくその背後には、宿命主義的な人生観が「鎮めの文化」として作動しているはずである。だから、格差社会化がますます進行しているにもかかわらず、彼らはその現実をそのまま受け入れてしまう。強いアノミー状態がそこに生じることは少なくなっているのである。

マートンは、アメリカ人がアノミー状態に置かれやすい背景にフロンティア・スピリットという「崩りの文化」があると指摘したが、その対極にあるのは伝統的な宿命観である。そもそも、E・デュルケム（1985）が最初にアノミー概念を提唱したときも、その対概念として掲げていたのは宿命主義だった。ただし彼は、それは近代ではすでに消えつつある意識だと述べていた。ところが、その前近代的な意識が、いまや再び前面へとせり出してきている。

じっさい、高校生新聞が2006年に行なった調査では、40%の高校生が「競争の結果、格差が広がるのは仕方ない」と回答し、30%の高校生が「努力しても報われない」と回答している。斎藤環（2005）は、この調査結果を受けて、「学習や修練によって自分が変わるという期待すら存在しない。まるで「自信がないこと」にかけては誰よりも自信があるとでもいうような、「確固たる自信のなさ」とでも言うべき態度」が、若い世代に蔓延しつつあると述べている。

このような社会的境遇と満足度とのギャップについて、大澤真幸（2011）は、自らの輝かしい未来を想定しうる者は現在を不幸だと語ることができるけれども、それを想定しえない者は現在を否定的に捉えることができないと指摘する。未来に対して可能性を感じることができれば、たとえ現状を否定しても、自らの

人生を全否定したことにはならない。しかし、未来が拓けていないと感じるときに現状を否定することは、自らの人生を全否定してしまうことを意味してしまう。人は、そのような状況に耐えられないというのである。

したがって、たんに未来が開けていないというだけでなく、さらにそれを自らの変えようのない宿命だと感じている人びとにとって、現状を否定的に捉え、それを不幸だと語るなどということは、けっして許容できないものとなるだろう。彼らは、宿命主義的な人生観の下でかつてのように煽られなくなり、そのためフラストレーションを溜め込まなくなっただけではない。それに加えて、現実にはたとえ困難が満ちあふれていたとしても、現在の自分に多少なりとも満足を感じうような題材を、否が応でも見出していかがるをえないのである。彼らが自己評価を行なうにあたって、準拠集団を低く設定する傾向にあるのは、おそらくその営みの一環でもあるのだろう。

ちなみに、そんな状況下で、どうあがいても現状を不幸としか感じられない者は、無理を押しても輝かしい未来を想定せざるをえない。かつてその役割を果たしていたのは宗教だった。来世において救われると信じることであれば、現世での不幸に耐え忍ぶこともできる。だから、かつてマルクスは、「宗教は阿片である」と喝破したのだった。現状を変革しようという意欲を削いでしまうからである。そうしてみると、先ほど指摘したように、「奇跡」や「あの世や来世」を信じる若者が増えているという事実は、彼らの置かれた境遇の劣悪さを物語っている側面もあるのかもしれない。

5. おわりに―社会的排除からの疎外―

今日の宿命主義的な人生観が、前近代的なそれと異なっているのは、理不尽な身分制度によって抑圧され、やむなく希望を諦めているわけではない点にある。しかし、前近代的な身分制度を理不尽だと考えるのは、そもそも私たちが近代人だからである。当の時代を生きた人びとには、それこそが自明の現実であり、たとえば農民も努力次第で武士になれるとは夢にも思わなかったはずである。これこそ本来の希望格差といえるものだろう。

他方、今日、生まれ持ったと考えられている素質の多くも、P・ブルデューとJ・パスロン（1991）が指摘するように、じつは与えられた社会環境のなかで、かつての身分制度と同じく格差を伴いながら再生産される側面が強い。たとえば、いくら天才的なピアニストであろうと、そもそも日常的にピアノに触れさせてくれ、定期的にレッスンに通わせてくれるような豊かな成育環境になれば、その才能に目覚めることもなかったはずである。ブルデューらは、その生育環境を文化資本と呼んでいる。

したがって、今日の新しい宿命観も、じつは前近代的なそれと本質的に違ってはいない。作られた素質にもとづく社会的な境遇の違いを、あたかも合理的なも

のと思い込んでいるだけである。このように、本来は社会構造的な背景から生まれた格差でありながら、それが個人的な理由によるものであるかのように思い込んでいる状態を、A・ファーロングとF・カートメル（2009）は、「認識論的誤謬」と呼んでいる。

自らが貧困であるか否かの準拠点をどこに設定するかは、人びとが置かれた客観的な境遇に加えて、その境遇をどのように主観的に判断するかによっても異なってくる。ここに、社会的排除という認識から排除された人びとが生まれてしまう素地がある。本来の準拠点を認識することから疎外された結果、フラストレーションを抱かない人びとが生み出されてくるのである。

社会的排除の対象となっていることを自ら認識しうる立場からも排除されている点で、これは二重化された社会的排除と呼んでもよい状態である。あるいは、社会的排除からの疎外といってもよいだろう。ここでいう社会的排除には、安部彩（2007）がいうように、社会関係の欠如、労働市場からの排除、教育機会の欠如、生活必需品の欠如など、多元的な要素が含まれている。いずれにせよ、宿命主義的な人生観の下では、排除されていることを当事者に意識させないような排除が、したがってフラストレーションさえ抱かせないような疎外が、人びとに気づかれないうちに進行していきやすい。

かくして、社会的排除を認識する営みからも排除された若者たちは、どんなに劣悪な社会環境に置かれていたとしても、その状況に対してフラストレーションを抱くことはない。希望の格差配分は、反発や絶望の対象となるどころか、「それが自分の宿命なのだ」と納得をもって淡々と迎え入れられることになる。「再埋め込み」への願望の切実さが「認識論的誤謬」を生み出していくのである。

さらに付言すれば、第2節で述べたように、身近な人間関係を充実させることによって社会体制的な劣悪環境を乗り越えようとする姿勢は、それを後押ししてしまうことにもなる。人間関係を重んずること自体は、たしかに良いことに違いないが、そこに「認識論的誤謬」が重なると、身近な範囲にしか自己評価の準拠枠を見出せなくなりがちだからである。今日、一方では若者たちの生活環境が悪化しているにもかかわらず、他方では彼らの生活満足度が上昇しているのは、このような社会的背景によるものだと考えられる。

註

- (1) このような時代精神の変化を象徴していたのが、コピーライターの糸井重里が1982年に発表し、大きな話題をさらった西武百貨店のコピー、「おいしい生活」だった。「おいしいことに理由はない、好きなものは好きだ」というこのコピーのメッセージは、社会的に共通了解されうる価値基準が消失しつつあった当時の世相をストレートに反映したものだだった。

この点について、上野千鶴子（1992：85）は、「差別化の上下を問わないヨ

コナラビの基準が、これほど見事に表現されたものはない。「良いか悪いか」ではなく「好きか嫌いか」の基準が意味するのは、まず第一に、選択基準の説明の放棄である。…第二に、差別化がヨコナラビになれば、異なったテイストが共存できる。第三に、相互の間のつまみ食いさえ許容される」と指摘している。

- (2) 金子真理子（2011）は、大多和直樹との共同調査の結果から、「校則に違反することがあるが生活力のある旺盛な生徒」や「自分を一人前の大人だと思っている生徒」を好ましいと感じる教師が、1979年から1997年へかけては増加していたのに、2009年では逆に減少していると指摘する。生徒役割から逸脱した少年に対して、いったん許容的になりつつあったのに、近年になって再び問題視する傾向へ転じているのである。

これは、教師と生徒の関係が、理想だけではなく実質的に緩やかで自由なものへと変わってきたからだろう。教師と生徒の間に制度的な縛りがまだ残っていた頃は、多少の逸脱は受け入れるだけの余裕が教師の側にもあったが、両者の関係が実質的にもフラットなものになってくると、自らの立場を危うくする脅威としてそれを受けとり、生徒にむしろ従順さを強く求めるようになったのである。

- (3) その結果、私たちの眼前に顕在化してきたのは、個々人の所有する人間関係の格差化である。経済や雇用の規制緩和は、人びとの貧富の格差を拡大させる。それと同様に、人間関係の規制緩和も、人びとの関係の格差を拡大させる。

かつては、制度的な枠組によって規制されていたがゆえに、人びとを取り巻く人間関係にそう大差はなかった。しかし、制度的な枠組の拘束力が緩んで人間関係の基盤を提供しなくなると、個人によってその濃淡や幅に差異が生じるようになる。そして、人びとの間に生じた格差は、人びとの価値を測る指標として機能しはじめることになる。

貧富の格差が限りなく小さな原始共産制の社会では、財はステータス・シンボルとはなりえず、したがって権威とも結びつかない。個人的な能力の違いがそこには反映されていないからである。それと同様に、良くも悪くも皆が同じような人間関係を営んでいれば、その関係性は、個人的な資質を推し量って分類するための指標として使えない。

しかし、人によって人間関係に大きな差異が生じてくると、そこには個人的な能力や魅力が反映しているかのように感じられるようになる。とりわけ現代のように成熟した社会では、財力の価値はすでに減退しているから、相対的に人間関係の価値が高まっていきやすい。こうして人間関係の多寡こそが人間としての価値を決めるかのような感覚が広がっていく。

また、今日のように人間関係が自由化した社会において、人間関係の豊かさは、高いコミュニケーション力を備えていることの証しでもある。そして、その関係の自由化をもたらした価値観の多様化は、互いに異なった価値観を調整

しあうために、かつて以上に高いコミュニケーション能力を要求する。

さらに、そのような社会では、価値内容の評価について共通の見解が存在しないため、ただコミュニケーション能力だけが、多種多様な価値観を抱いた人びとの間で唯一共通の評価基準として残ることになる。それは、市場において多種多様などんな商品とも交換しうる貨幣のような役割を果たすのである。

かつてF・ハイエク（1986）が指摘したように、高度に複雑化した経済システムの下では、社会全体を見通すことは不可能であるが、市場価格に応じて個人が自由に行動すれば、社会全体の効率的な資源分配が結果的に可能となる。貨幣価値が全体を調整するためのパラメータとして機能するからである。

それと同様に、数多くの価値観が錯綜した現代社会では、すべての価値項目の内容を見通すことは不可能であるが、コミュニケーションをつうじて獲得された説得力の強さに応じて、各々の価値項目の評価が間接的に行なわれることになる。価値の内容ではなくその訴求力が評価のパラメータとして機能するのである。

したがって今日では、人間関係に恵まれた人物は、高いコミュニケーション能力を備えており、人間としても魅力に富んだ価値ある人物だと看做されやすい。そういう人物は、当然ながら幸せな人生を送ることもできるだろう。そのように考える人びとが、とりわけ成熟社会に生まれ育った若い世代で増えている。

誰しも、自分は魅力のある人間だと、そして幸せな人生を送っていると、周囲の人びとから思われたいものである。そのため、今日の若者たちは、心の許せる友だちがいるだけでは物足りず、友だちから自分が認められたいと願うと同時に、あるいはそれ以上に、自分を認めてくれる友だちがいると第三者からも認められたいと願うようになっていく。

このように「自分が承認されていることを承認されたい」という感性のあり方を、浅野智彦（2011b）は「承認の二重化」と呼んでいる。昨今の若者たちは、身近な他者から自己承認を受けたいという願望を強めているが、じつはそれ以上に、自己承認を与えてくれる豊かな人間関係を自分が所有していることを、その外部の第三者からも承認されたいと切望しているのである。

- (4) もちろん、今日の若者たちは、人間関係におけるリスクの高さを、ただ手をこまねいて見ているだけではない。その見通しの悪くなった人間関係を積極的に馴致しようと、さまざまな工夫を凝らしている。斎藤竜太（2010）が行なった調査によれば、友だちの誕生日にプレゼントをする若者が、1990年代後半から増えつつけている。もともと若年層では他の世代よりも数字は高いが、他の世代ではほとんど変化がないのに対して、若年層だけで増加しているのである。

しかも、彼の報告によれば、その増加幅は女性よりも男性のほうが大きい。1998年には25.0%だったものが、2008年には36.4%まで上昇している。人間関係を円滑に運営するためにまめにプレゼントを贈りあうのも、人間関係のリス

クに立ち向かう1つの手立てなのだろう。

- (5) 人間関係の流動化がますます進むと、近年まで若者たちが追い求めてきた「個性的な自分」ですらも、自由な人間関係を運営していく上では、大きなリスク要因と感じられるようになる。価値観の似通った者どうしで形成される集団の内部では、周囲と異なった「特別な自分」の自己呈示は、へたをすると自分だけが浮いてしまう契機にもなりうるからである。そのため、現在の若者たちは、周囲からあまり突出した個性を見せてはならないと感じるようになっていく。個々の形は微妙に異なっているが、しかし全体の構図のなかにびったりと収まるジグソーパズルのピースのように、集団のなかで自分の居場所を確保するためのツールとしてのみ、彼らの個性は表出されるのである。

換言すれば、彼らが必要としているのは「さりげない個性」であって、自分の居場所さえ確保できてしまえば、その以上の特別な個性は不要である。その必要性を超えた過剰な個性は、人間関係の一体感を保ち、維持していく上でむしろ邪魔にすらなる。集団という全体の構図のなかに、1つのピースとして収まらなくなるからである。現在では、周囲の人びとに対して特別な自分を誇示し、その姿を際立たせたいという欲求よりも、その人間関係から排除されるかもしれない不安のほうが強くなっている。2000年代初頭まで見られた「私探しゲーム」の幕はすでに降り、いまは「友だち探しゲーム」の幕が開いている。

- (6) このような再埋め込みを求める感性は、近年、大ヒットした映画「ALWAYS・三丁目の夕日」にも見てとることができる。観客たちは、あの昭和レトロな画面のなかに、かつての安定した理想的な共同体を見出そうとしていたにちがいない。しかし、それはけっして現実の昭和ではない。当時、まだ一般的に見られた生活上のさまざまな困難や、現実の人間関係の鬱陶しさをすべて捨象してしまった上で、あくまでスクリーンのなかに構築された虚構の世界としての、いわば理想化された昭和時代だったのである。

その点では、「ALWAYS」に4年も先だつ2001年に公開されたアニメ映画、「クレヨンしんちゃん・嵐を呼ぶモーレツ！オトナ帝国の逆襲」のほうが、その荒唐無稽なストーリーに反して、じつははるかにリアルな作品だったといえる。そこには、理想化された昭和時代を求める感性が、スクリーンのなかにストレートに描き込まれていたからである。「あらゆる思い出と出会える場所」が謳い文句の、「20世紀博」と称する昭和テーマパークへ惹き込まれていったオトナたちの姿は、再埋め込みを渴望する今日の感性を、ものの見事に先取りして指し示したものだ。

- (7) より分かりやすく、次のような例を挙げてもよい。一平卒クラスにいる黒人の兵士は、下士官クラスにいる黒人の兵士よりも、社会的地位は低いにもかかわらず、その境遇に対する満足度は高い。なぜなら、下士官クラスの兵士は、同じくエリート層で出世の早い白人たちに自分を準拠させ、黒人であるがゆえに出世速度が遅い自分の境遇を不満に思うが、一平卒クラスの兵士は、軍隊に

も入れずに不安定な境遇に置かれた黒人たちに自分を準拠させ、それに比べれば自分の境遇は恵まれていると感じるからである。

下士官クラスの黒人兵士の満足度が低いのは、白人と同じレベルの希望が平等配分されているからである。それに対して、一平卒クラスの黒人兵士の満足度が高いのは、そもそも最初から希望が不平等にしか配分されていないからである。希望格差は、それがもっともな状態だと感じられるときには、人びとの満足度を高める作用を果たす。もちろん、だからといって、この例からも明らかのように、それが社会的に正しいというわけではない。社会正義の実現のためには、そもそも希望の格差配分が疑念なく受け入れられてしまうのはなぜなのか、その理由が問われなければならない。

- (8) 電通総合研究所が2005年に行なった調査では、自分の生活程度を「中の下」や「下」と考える人びとが、以前と比較して大幅に増えているが、また同時に、その「生活に満足」と感じる人びとも、また過去最高の多さとなっている。三浦展（2005）は、このような状況分析に独自の調査結果を加え、食うに困るほど貧窮しているわけではないが、低い所得水準の生活に安住したまま、上昇しようという意欲をあまり持ちあわせない人びとが、とくに若い世代で増えていると指摘している。
- (9) 今日の中高生たちは、「格が違う」とか「身分が違う」などと形容して、クラスでの上下関係に過剰なほど気を遣い、交友関係を分断しつつ、スクールカーストと呼ばれる状態を作り出している。格にせよ、身分にせよ、会社での上司と部下や、学校での教師と生徒のような、社会的に付与された役割や立場の違いを指す言葉ではなく、人間の本質的な属性の違いを指す言葉である。だからこそ、階層や階級ではなく、カーストと表現されるのである。しかも、そのカーストの違いは、学力の差によってではなく、コミュニケーション力の差によって定まる傾向が強い。学力のように数値化されず、努力の結果も見えにくい能力だからこそ、それは個々人に本来的に備わった属性とみなされやすいともいえる。

このような新たな宿命観の広がりには、鈴木謙介（2007b）のように、ネット社会の特徴として語ることもできるだろう。彼によれば、つねにネットに接続され、外部へ開かれているはずの現代社会で、しかし外部を志向することができないのは、まさにそのネットによって自己選択が先取りされているからである。自分の意思による選択に有効性を感じえなくなった人びとは、膨大な情報の解析結果から示される選択肢を宿命として受け入れざるをえないのである。

文献

安部彩（2007）「日本における社会的排除の実態とその要因」『季刊・社会保障研究』43(1)：27-40.

浅野智彦（2011a）「大学生の生活と意識(4)」日本社会学会第84回大会（関西大

- 学千里山キャンパス) 配布資料.
- 浅野智彦 (2011b) 『趣味縁からはじまる社会参加』 岩波書店.
- ブルデュー, P.・パスロン, J. (1991) 宮島喬訳『再生産』 藤原書店.
- NHK放送文化研究所 (2010) 『現代日本人の意識構造 (第7版)』 NHKブックス.
- デュルケム, E. (1985) 宮島喬訳『自殺論』 中央公論社.
- ファーロング, A.・カートメル, F. (2009) 乾彰夫ほか訳『若者と社会変容』 大月書店.
- ギデンズ, A. (1993) 松尾精文・小幡正敏訳『近代はいかなる時代か』 而立書房.
- ハイエク, F. (1986) 田中真晴・田中秀夫訳『市場・知識・自由』 ミネルヴァ書房.
- 三浦展 (2005) 『下流社会』 光文社新書.
- 金子真理子 (2011) 「生徒へのまなざしはどう変わったか?」 『青少年問題』 643: 38-43.
- 刈谷剛彦 (2001) 『階層化日本と教育危機』 有信堂高文社.
- マートン, R. (1961) 森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳『社会理論と社会構造』 みすず書房.
- 西田芳正 (2010) 「貧困・生活不安定層における子どもから大人への移行過程とその変容」 『犯罪社会学研究』 35: 38-53.
- 奥田知志 (2010) 「第三の困窮と犯罪」 『犯罪社会学研究』 35: 21-37.
- 大澤真幸 (2005) 「不可能性の時代」 『世界』 1月号.
- 大澤真幸 (2011) 「可能なる革命第1回・「幸福だ」と答える若者たちの時代」 『atプラス』 07: 114-127.
- 大竹文雄 (2011) 「第14回東洋経済LIVEセミナー」 2011年5月25日.
- パーソンズ, T. (1974) 佐藤勉訳『社会体系論』 青木書店.
- リースマン, D. (1964) 加藤秀俊訳『孤独な群衆』 みすず書房.
- 斎藤竜太 (2010) 「若者の消費特性と価値観」 『生活定点テーマ分析レポート』 博報堂生活総研 ONLINE (2010年5月)
- 斎藤環 (2005) 『「負けた」教の信者たち』 中公新書ラクレ.
- 柴田悠 (2010) 「近代化と友人関係」 『社会学評論』 61(2): 130-147.
- 鈴木謙介 (2007a) 『わたしたち消費』 幻冬舎新書.
- 鈴木謙介 (2007b) 『ウェブ社会の思想』 NHKブックス.
- 辻泉 (2006) 「「自由市場化」する友人関係」 岩田考ほか編『若者たちのコミュニケーション・サバイバル』 恒星社厚生閣, 第2章所収.
- 上野千鶴子 (1992) 『〈私〉探しゲーム』 ちくま学芸文庫.
- 山田昌弘 (2004) 『希望格差社会』 筑摩書房.